

西洋絵画

を楽しもう



京都市京セラ美術館（京都市美術館）は、1933年に開館された歴史ある美術館。現在、6月8日まで『モネ 睡蓮のとき』展が開催されている。また、6月25日から10月13日までは『どこ見る？ どう見る？ 西洋絵画！ ルネサンスから印象派まで』展が開催される。これらの展覧会にちなんで、ここでは印象派までの西洋美術史と、実際の『モネ』展の様子を軽く紹介する。（みずおにぎり）

中世

キリスト教が主な題材となり、神中心の視点のため、画家自身の名はほとんど残っていない。聖書の場面や人物をいかに現実世界と区別して表現するかが重視され、身体が歪で平面的だったり、画面に奥行きが感じられなかったり、不自然に見える描写が主流だった。聖書の人物はたいいてい顔の周辺が丸く黄金で塗られて表現されている。

古代

古代メソポタミアから古代エジプト、古代ギリシア、古代ローマと時代が続く。古代ローマでは、古代ギリシアへのリスペクトから大量に彫刻の複製が作られた。これらの彫刻は白一色の印象が強いが、色素が劣化しただけで元々は着色されていた。

原始

動物や狩猟の様子を描いたアルタミラ洞窟壁画やラスコー洞窟壁画などの壁画絵画だけでなく、ヴィレンドルフのヴィーナス像などの裸体像や偶像など、美術の原点がみられる。

ラスコー壁画▶



ルネサンス

14世紀終わり～16世紀半ば頃

「ルネサンス（Renaissance）」とはフランス語で「再生」を意味し、「文芸復興」と訳す。古代ギリシアやローマの文化を見直し、あらゆる分野で才能を発揮する人が理想とされ、それまでのキリスト教中心の見方から人間中心の見方へと移り変わった。自然を忠実に完璧に描写することに重きが置かれ、遠近法や明暗法のような技法が生まれる。レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロが三大巨匠と評され、彼らが活躍した15世紀末から16世紀初頭にかけての約30年間のことを特に盛期ルネサンスと呼ぶ。

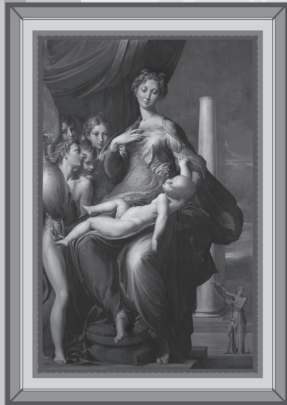
▼レオナルド・ダ・ヴィンチ
『モナ・リザ』



16世紀前半～16世紀終わり頃

ルネサンスでの調和のとれた完璧な表現を受け、不自然な誇張や非現実的な表現を取り入れてた。人為的に強調することで、自然を超える美を表現することが重視された。

◀パルミジャーノ
『長い首の聖母』



はみだし
すてーじ

1年経つのが早すぎる問題
⇒同感です。もう少し1回生を謳歌したかったです

（農・院 いわ）
（気付けば新歓を開催する側に……；編）

バロック

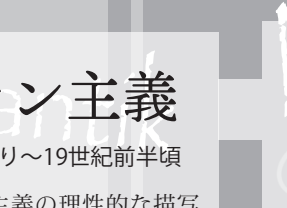
17世紀頃

16世紀初めの宗教改革で信者を減らしたカトリック教会が、感情移入しやすいキリスト教の宗教画を用いて布教しようとして生まれた。複雑な動きから生まれる躍動感や、装飾性、強烈なコントラストなど、感覚に訴えかける表現が主流。『フランダースの犬』（児童文学・アニメ）で主人公ネロが最初に見たのは、ルーベンスの『キリスト昇架』と『キリスト降架』という三連祭壇画。

▲ルーベンス
『キリスト降架』



▲フェルメール
『真珠の耳飾りの少女』



ロマン主義

18世紀終わり～19世紀前半頃

新古典主義の理性的な描写や規範に則った理想美に対抗して生まれた。個人の感性や自由な想像力で表現し、冒険心を掻き立てるようなシーンが多く描写された。社会的な事件や異国、雄大な自然美など、聖書や神話だけでない様々な主題で描かれるようになった。ドラクロワの『民衆を導く自由の女神』などが有名。

▼ドラクロワ
『民衆を導く自由の女神』



写実主義

19世紀前半～20世紀前半頃

産業の発達により社会構造も変化し、労働者や農民などの姿や、何でもない日常の風景を切り取り、見たものを見たままに描写しようとした。ミレーの『落穂拾い』などが有名。

▼ミレー
『落穂拾い』



はみだし
すてーじ

先月のらいふすてーじ出してなかったあああ…… 俺の1000円が……
⇒1000円大事ですよ

ロココ

18世紀前半～18世紀終わり頃

フランスの宮廷から始まった様式で、個人の楽しみを中心とした優雅な装飾と人工的な色彩などの表現が主流。享楽的で貴族的。フレゴナールの『ブランコ』は特に有名で、『アナと雪の女王』（映画）のなかにも「生まれてはじめて」の歌のシーンでこの絵画を模した絵が登場した。

▼フレゴナール
『ブランコ』



新古典主義

18世紀後半～19世紀初め頃

フランス革命によって貴族階級が没落し、貴族趣味の強かったロココに代わって登場した。絵画は享楽的ではなく知的で倫理的でなくてはならないという考え方から、再び理想的な規範をギリシア・ローマに求めた。ナポレオンが自身の宣伝のためにお抱えにした画家ダヴィッドが特に有名。彼はナポレオンに頼まれて、白馬に乗ったナポレオンの肖像画や、戴冠式などを描いた。

▼ダヴィッド
『サン・ベルナル峠のナポレオン』

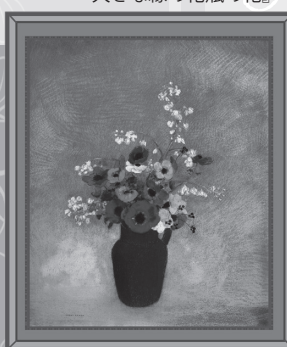


象徴主義

19世紀半ば～19世紀終わり頃

写実主義に反発して、印象派と並行して発展した。見えているものではなく、画家の思想や不安、生死や運命などの抽象的なものを視覚化するために、神話や文学などを象徴的に描いた。モローやルドンなどが代表的。

▼ルドン
『大きな緑の花瓶の花』



（工・1 判別式D）
（春休みの出費で懐が寂しいです；編）

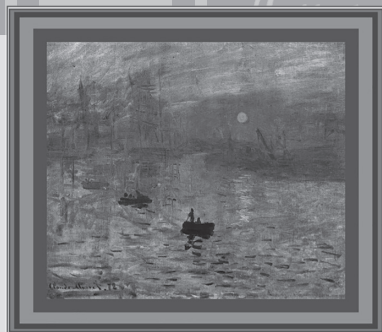
印象派

19世紀初め～20世紀初め頃

写実主義の流れで、人間に実際に見えるものをより忠実に描こうとした。そのため、題材は聖書や神話ではなく画家自身が実際に見た自然や日常の風景が多く、より自然の光の変化を捉えられる戸外制作が主流。人間は現実世界を隅々まで完璧に知覚するわけではないとの考えから、現実世界に存在するもの全てを再現して描くのではなく、目に映った光や影といった「印象」をそのまま画面に表現しようとする点描画などが生まれた。マネやモネ、ルノワールなどが有名。ゴッホやセザンヌ、ゴーギャンは、印象派の画法をさらに発展させ、ポスト印象派と呼ばれた。「印象派」とはモネの作品『印象 日の出』が名前の由来であり、元々は彼らを風刺するために生まれた新語だったと言われている。

モネ▶

『印象 日の出』



▼ルノワール

『セーヌ川の舟遊び』



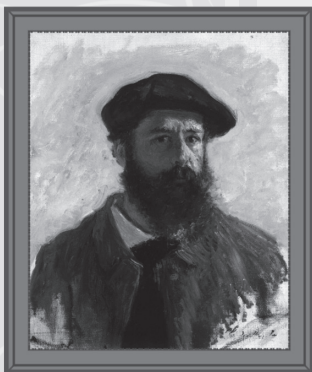
◀マネ

『笛を吹く少年』



クロード・モネ

1840～1926



▲『自画像』

印象派を代表するフランスの画家。最初の妻カミーユが亡くなった後、セーヌ川沿いのシヴェルニーに移り邸宅を構え、その庭（通称「水の庭」）の風景をモチーフにした連作を多く描いた。連作とは、同一のモチーフを、季節や時間、天候などの条件を変えて複数枚描くことである。『睡蓮』の連作を展示した後、再婚した妻アリスの死や、自身の白内障、長男ジャンの死など、数々の困難が重なりしばらく筆を置く。友人や娘に精神的に支えられて再び筆をとり、巨大なキャンバスを4枚繋げた『睡蓮』の「大装飾画」に取り組んだ。「大装飾画」はオランジュリー美術館に収められ、シヴェルニーの自邸は今でも遺され公開されている。

- 1840 11月14日 パリに生まれる
- 1858 初めて油彩画を描く
- 1870 カミーユ＝レオニー・ドンシュールと結婚
- 1874 仲間たちと第1回印象派展開催
- 1879 妻カミーユが亡くなる
- 1883 ノルマンディーの小村シヴェルニーに転居
- 1891 『積みわら』の連作を展示
- 1892 『ボプラ並木』の連作を展示
- アリス・オシュデと再婚
- 1893 私邸の近くに、睡蓮の池を囲む庭、通称「水の庭」の造成を開始

- 1895 『ルーアン大聖堂』の連作を展示
- 「水の庭」に日本風の太鼓橋を架ける
- 初めて「水の庭」を描く
- 1897 「水の庭」に浮かぶ睡蓮を描き始める
- 1898 『セーヌ河の朝』の連作を展示
- 1900 『睡蓮の池』の連作を展示
- 1904 ロンドン滞在中に描いた連作を展示
- 1909 『睡蓮』の連作48点を展示
- 1911 妻アリスが亡くなる
- 1912 『ヴェネツィア』の連作を展示
- 白内障と診断される
- 1914 長男ジャンが亡くなる

- 1914 本格的に制作を再開し、大画面の『睡蓮』に着手する
- 1915 「大装飾画」の制作のため、広大な「第三のアトリエ」を建設
- 1918 第一次世界大戦休戦の翌日にあたる11月12日に、友人で首相のジョルジュ・クレマンソーに対し、「大装飾画」の寄贈を申し出る

- 『枝垂れ柳』と『日本の橋』の連作に着手
- 1926 12月5日 シヴェルニーの自邸で亡くなる
- 1927 5月17日 計22枚のパネルからなる「大装飾画」を展示するクロード・モネ美術館（オランジュリー美術館）が公開される
- （『モネ 睡蓮のとき』の略年表より一部抜粋）



▲『死の床のカミーユ・モネ』



▼『散歩、日傘をさす女』（アリスとジャンがモデル）



▼『積みわら 雪の朝』

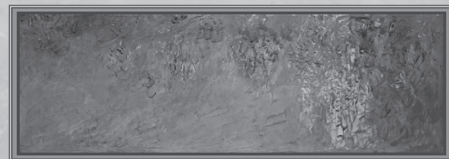
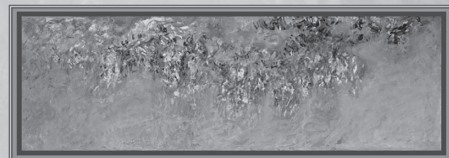
（理・1 U）
（自転車使えなくなるのは困るけどテンション上がる；編）

はみだし
すてーじ

帰省して強く思った。やっぱ京都寒い！
⇒ナチュラルに雪降りますよね

「水の庭」

睡蓮の浮かぶ「水の庭」の周りには、アガパンサスやアイリス、キスゲや枝垂れ柳などの植物や日本風の太鼓橋など、様々なものがモネの創作意欲を刺激した。



▲『藤』（1919～1920年頃）
100cm×300cmの大きなキャンバスに描かれた絵。
これらの2枚はもともと『睡蓮』の「大装飾画」の上を飾るために描かれたもの。



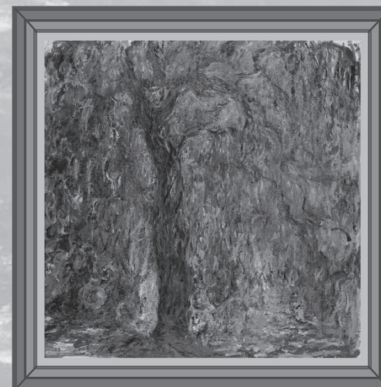
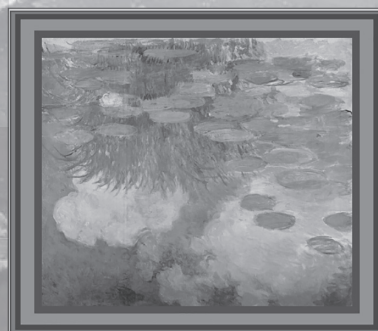
◀『日本の橋』（1918年頃）

モネは日本文化にも関心があった。1876年には、妻カミーユをモデルに、着物を着た女性が扇子を持って振り返り微笑んでいる『ラ・ジャポネーズ』という油彩画を描いている。

▼『枝垂れ柳』（1918～1919年頃）
太鼓橋の近くに植えられた枝垂れ柳。この頃のモネは白内障の症状が進み、青を感じることが困難になったため、赤や黄が強い。

▼『睡蓮』（1914～1917年頃）
睡蓮の花や葉そのものから、水面、水面に映る空や柳などの風景へと、モネの関心が次第に変化していく。

▼『睡蓮とアガパンサス』（1914～1917年頃）

Le dernier Monet
Paysages d'eau

モネ

睡蓮のとき

印象派の巨匠クロード・モネの晩年の軌跡を、「水の庭」での作品を中心に、50点以上の絵画とともに迎える美術展。

ひたる。光に。モネに。

京都市京セラ美術館



場所：京都大学の入学式の会場、「みやこめっせ」から神宮通りを挟んだ向かい側
行き方：百万遍➡（市バス201または206）➡東山二条・岡崎公園口➡徒歩9分。
開館時間：10時～18時
休館日：月曜日（祝日を除く）

※ 〇 内の値段は前売券の値段。前売券は生協ショップのチケットカウンターでも購入可能！

●『モネ 睡蓮のとき』
日時：6月8日まで
入館料：一般2,300円
高大生1,700円
小中学生1,000円

●『どこ見る？ どう見る？ 西洋絵画！ ルネサンスから印象派まで』
日時：6月25日～10月13日
入館料：一般2,200円（2,000円）
高大生1,400円（1,200円）
小中学生900円（700円）



▲他の美術展や常設展の情報は美術館公式ホームページをチェック！ 「京都市キャンパス文化パートナーズ制度」を利用すると、常設展（コレクションルーム）に限り入館料が100円になります。

はみだし
すてーじ

卒論を余裕をもって提出しようとしたら、締切時刻を勘違いしてギリギリでした……
⇒そういうことってありますよね。余裕を持った時間に家を出たのに、休日ダイヤなことを忘れて一本電車を逃して結局ギリギリの電車になるとか……

（文・4 しけ）
（ギリギリでも間に合ってよかったです；編）